

千人同心がゆく

上
巻



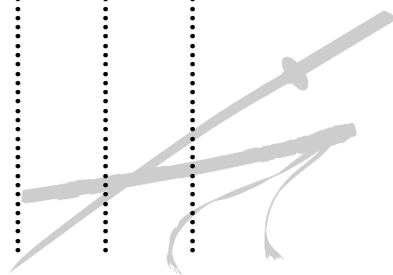
挿絵 榎本 さき



千人同心がゆく 上巻

目次

剣の虜	5
長崎幻想絵巻	24
二百年來の声韻	41
天狗の影	54
武州一揆	74
バラガキ	94



劍の虜

一

八王子を二歩外に出て、千人同心が広く分布する地区のひとつが秋川流域の雨間村である。が、それより更に上流にいくと五日市村があり、なおも山奥に大久野村がある。いずれも千人同心が在所しており、役目があれば彼らは応じた。それ以外の時間は昼夜を問わず、どう過ごすかは、個人の思い如何である。

多摩は江戸とは一線を画した、文武の才に溢れる土地だ。蘭学を好み、それを世に生かしたのも、千人同心だった。古来の武道を極めたのも、西洋の砲術を実践に昇華させたの

も、やはり千人同心だ。

ただの田舎武士と侮れぬ多才の輩。千人同心とは、そういう逸材集団である。

さて。

大久野村玉之内に住まう男の名を、宮岡武左衛門という。この男は、代々千人同心を務める家に生を受けた。とはいっても、生粋の千人同心ではない。江戸時代中期、このときの宮岡家当主が、千人同心の地位を得た。同心株の取得、このことは卑しくもなければ、恥じるべき行為でもない。当時、窪田組同心となっていた宮岡家の又従兄弟にあたる金子十郎左衛門から同心株を購入して一二俵一人扶持の千人同心になったという。身分と家名を売りたい者と望んだ者、両者の目的は一致して、以来、宮岡家は農業と掛け持ちでありながら、公職にあるとき限りは千人同心なの

である。宮岡武左衛門は質素な山間の暮らしに不服を覚えたことはなく、この家に生まれたことも、千人同心の職を務めることも、運命であると信じ切っていた。

千人同心に課せられた公職のひとつに「日光勤番」というものがある。半年に一度、五〇人交替で日光東照宮火の見番を務める重要な仕事だ。だから巡る年まわりで、一度も日光に行かぬ者もいれば、二度も赴く者もいた。



山間で暮らす彼にとって、日光の厳しい寒さなど些かの苦でもない。冷気や山霧に悩まされる同心たちがいても、宮岡武左衛門にとっては、日常と大差のない環境である。だから寡黙に務める彼は、勤勉な一面を以て人に慕われてきた。

転機は、いつの世も唐突である。彼は齡三〇を超えるまで、物事に熱中することはなかった。仕事ひとすじ、こういう男が、何かの拍子で豹変するのは古今東西の例に洩れるものではない。

宮岡武左衛門にとっての転機、それは剣術だった。

「知ってるか、近頃新しい流派の剣術がこのあたりで流行しているらしいぞ」

千人同心窪田組のなかで、そういう会話が聞かれた。他所の組でも聞かれる。千人同心といえは塩野適斎の道場で学ぶのが普通と云

われるが、新しいものの好きの若い同心見習いはそういう関心も早い。若くもない宮岡武左衛門は、傍観の立場だった。

「棒振りに、なにほどのことやある」

同心でありながらも泰平の世において、必要なものは実務能力だけでいい。実戦などという機会は、今後も巡ることはないだろう。

極めて合理的な考えをすれば、そういうことだ。宮岡武左衛門は剣術を怠ってきた訳ではない。それなりの道場と、それなりの学問を尊ぶことは、武士として当然の嗜みだ。それなりのことを修めてきた彼は、幾度となく流派普及に躍起となる兵法者たちを見てきた。が、それなりの学びの窓は、心を熱く動かすほどではなかった。武術など形式的でいいと、宮岡武左衛門はそう考えていた。

五日市まで所用に赴いた際、宮岡武左衛門は件の兵法家の、新しい流派の稽古を目の当

たりにした。そのとき、これまで感じたことのない衝撃を覚えた。

「なんだ、これは」

思わず声が溢れ出た。丸太のような木刀と、手先の技よりも気組みを重視したものは、剣術稽古としては実に斬新だ。いや、それは道場剣法ではなく、合理的に人を斬ることに主眼を置いた剣術だった。

寡黙な宮岡武左衛門の表情は一変した。剣を握るからには、役に立ってこそのものである。これまで学んだ

「それなり」

では、いざ天下に事が起きても、御公儀の役にも立たない。

「ぜひ、門人に」

満座でとっさに申し入れた宮岡武左衛門の情熱は、口にした本人こそ驚いたものであろう。こんなこと、生まれて初めてだ。

「求める者には惜しみませぬ」

力強く応えた兵法家の名前を、近藤内蔵助長裕という。

剣とは、人を生かしもすれば殺しもする。

生かすという美辞麗句を厭というほど見てきた宮岡武左衛門は、これが人を合理的に斬るための剣であると知った。人を斬ることは感情ではない。斬るべき所作を行えば、苦もなく出来ることである。しかし、その所作を修めることこそ難しいのだ。

宮岡武左衛門は一目で理解した。近藤内蔵助の剣は、道場のそれではなく実戦のための剣。どうすれば人は斬れるかという点を追及した剣なのである。そして、それを用いる者がそれを極めることで、技は殺人剣にもなるし、活人剣にもなる。

奥が、深い。

どうせやるならば、どこまで深く極められ

るかを求めている。宮岡武左衛門、三三歳。遅咲きの剣術修行であった。

近藤内蔵助の流派を、天然理心流という。

のちに幕末動乱の世を震撼させた新選組局長・近藤勇が用いた流派である。内蔵助はその始祖だ。無名だった彼は、自ら興した流派の剣の普及に勤しんでいた。勿論、江戸で名だたる道場たちから見れば、天然理心流なるものは、当節売出し中の、名もなき剣法ではない。

「いや、生ぬるい剣術よりも、性に合う」
そういう者も、少なくなかった。

近藤内蔵助の門人となつた旗本は大勢いたし、地縁からか、相模方面にも流派は浸透していった。恐らくは相模の門人から、八王子や多摩にいる千人同心のことを耳にしたのだろう。八王子の郊外に近藤内蔵助が足を運んだのは、そういうことがあつてのこと。すべ

てが偶然であり、かつ、必然だった。

宮岡武左衛門の生涯で、天然理心流との出逢いは運命だった。それなりの生き方をすればいいという考え方が一新された。

「どこに、そんな魅力があるのだ」

組仲間の疑問は当然だ。多くの者は塩野適斎の流派である大平真鏡流で、それなりの剣術を行うため千人町へ赴く。これも千人同心の仕事のようなものだという、慣れの常識から剣術をしているのだ。所詮、剣客ともてはやされる一握りを除けば、多くはその程度の浅慮で剣術をする。そういう時代だった。

「魅力は、簡単に説明することが出来ない」

宮岡武左衛門は、困惑した。

「なら、塩野の道場でやってれば、同心としても安泰じゃないか？」

「そうかな」

「そうさ、梓の中で我らは与えられたことを、粛々としていればいいだけのことだよ」

「そんな風に、考えもしなかったな」

強いて云えば、宮岡武左衛門は言葉を継いだ。

「一念は人の一生を越える力となる。飾りだけの剣術は、のちの世に役が立ち申さず」

「そんなものかい」

「口下手で、これ以上は」

これだけの言葉を発するだけでも、日頃の寡黙さとは些か異なると、多くの者は気づいていた。ああ、本当に夢中なのだ、と。

このことは多くの千人同心たちの中でも話題となった。寡黙でどこもなく地味だった宮岡武左衛門を豹変させたのは、果たして何だろうか、と。

この当時、千人同心は主に二つある剣術の流派を学ぶことが一般的だった。塩野適斎が

師範である大平真鏡流。もうひとつは、武蔵国に根付く甲源一刀流。このいずれかに、何となく属することが多かった。そのなかで一握りの秀逸な人材は紹介状を握りしめて、江戸の有名道場に足を運んだ。

「天然理心流？なんだい、それは」

まだ多摩の多くは、この流派を知らない。これは当然の反応だった。

「剣を学ぶなら、江戸に限る。位は桃井、力は斎藤、技は千葉。これくらいのこたあ、市井で知らぬ者もねえ」

この三道場のことを形式的に評した言葉は明治のもので、当時は口にされたものではない。が、口にせずとも肌で感じられたからこそ、そういう言葉も生まれたといえる。そしてそれは、諸国にも箔付の看板であることが伝播し、結果的に優秀な剣才が江戸に集まった。

位は桃井、力は斎藤、技は千葉。桃井とは、品格随一とされた鏡新明智流四代目・桃井春蔵直正を指す。斎藤は、練兵館二代目・斎藤弥九郎龍善。千葉は、北辰一刀流玄武館二代目・千葉栄次郎成之とされる。

剣術を学ぶなら江戸まで来い、江戸で一番なら日本一だ。そういう空気は、たしかに存在していただろう。剣術に格式や権威を求める者にとつて、こういう有名どころは有難いものだったに違いない。
が。

天然理心流は権威付けという飾りのある剣術ではない。実戦を念頭に置き、殺人を極めることを明確とした剣術だ。殺人を極めると云うことは、こういうことをしたら、容易に人を殺めてしまうという、最後の一線を自覚させることが目的である。それを理解できるからこそ、人を活かすギリギリの決断に至る

という教えなのだ。例えば、丸太のような木刀にしても

「それを自在に振れる腕力があつてこそ、初めて重い真剣を自在に使いこなせる」

といった近藤内蔵助の実戦哲学を体現している。太平の世にあつて、刀の使い方すら知らぬ武士も多い。サムライとはなんぞやという、原点の答えがここにはあつた。

「飾りだけの剣術は、のちの世に役が立ち申さず」

宮岡武左衛門の言葉は、武骨で粗野ながらも、頷けるものだった。

実は、宮岡武左衛門が入門するより先に、千人同心窪田組見習同心・小林勘吉が入門していた。小林勘吉は千人同心としては、宮岡武左衛門より格下になる。しかも歳は一五も下、それでも兄弟子には違いない。

「武左衛門殿が弟弟子になるということは、畏れ多きこと」

小林勘吉の戸惑いに、宮岡武左衛門は殊勝な物云いで応じた。

「道の先達に若輩などありはせぬ」

「しかし」

「公務ならまだしも、これは私事にて」

小林勘吉と同時期に門下となっていた千人同心志村組見習同心の蒔田綱八は、この気構えに感動した。並大抵のことで口にできる言葉ではない。ゆえに弟弟子である宮岡武左衛門に一目も二目も置いた。

剣とは、没頭すれば己のすべてを注ぐ《道》となる。生真面目な男ほど、その深みに溺れていく。宮岡武左衛門がそれに部類すること、は、よもや申すまい。

天然理心流は剣術だけではない。柔術と棍術、この三術を一体とした、総合兵法である。それぞれが気組みひとつで、戦場を渡り歩くための術として教えられていた。

宮岡武左衛門が没頭したのは剣術。天然理心流の、ほんの一部に過ぎない。実に武道というものは、奥が深く果てしない。さて。

宮岡武左衛門が近藤内蔵助の門人となった頃に、門下となったひとりの男がいる。戸吹村中郷の名主で千人同心家でもある、坂本戸右衛門の長男・三助だ。このとき二三歳頃とされるから、まだまだ鼻柱の強い若気が漲っていた。武士ではなく名主の倅が、こうして剣術の稽古に没頭できたところに、多摩地方

の特異な気風が垣間見える。三助は持つて生まれた才覚と情熱で、みるみると剣の腕を上げていった。この若い兄弟門人の存在は、宮岡武左衛門さえも発憤させたと思像できる。

三助は、太陽のような男だった。

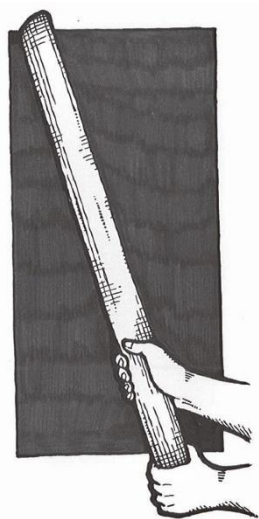
若さだけではなく、気持ちのよいさっぱりした性格が、先輩から可愛がられ後輩から慕われる。天賦といつてよい。さらに剣筋がよいのだ、太陽という表現は云い得て妙である。

「三助さん、俺たちも学びたい」

戸吹の若者たちは三助に憧れて天然理心流へと入門した。ここから多くの才能が大輪の如く花を咲かせていく。

「いいな、戸吹は」

近藤内蔵助は、一種の理想郷だと微笑んだ。三助を中心に、天然理心流の村が具現化したことは、奇蹟だった。自然と、近藤内蔵助は坂本三助を鼻祖にした。三術の総合兵法も、



徹底して鍛えて伝えた。口にこそしないが、恐らくは己の後継者にと考えたのは、このときではなからうか。

宮岡武左衛門が入門して、はや八年が過ぎた。宮岡武左衛門はついに、天然理心流免許を修めるに至る。これがあれば、天然理心流剣術を人に教えることが許されるのだ。こういう門人が増えれば、近藤内蔵助に代わり普及が適う。

「武左衛門よ、これよりは弟子を取って門人

を教えること。ただし、実の子供は門人にしたらいかんぞ。人は不器用な生き物でな、きつと甘やかすか、厳しくし過ぎる。これでは正しく道を伝えられぬからな。そういうときは、同じ門人の免許を修めた者に託すがいい」
「我が子にも学ばせたく存ず。三助殿精進のあかつきには、そこへ託すつもりにて」
「殊勝なことよ」

近藤内蔵助はそう口にした。宮岡武左衛門が大久野の屋敷に道場を構えて、子弟を取ることを近藤内蔵助は望んでいた。
が。

宮岡武左衛門は道場を開こうとせずに、今度は柔術を一層極めようと躍起になった。このとき四〇を超えた宮岡武左衛門の心には、真摯に自らを昇華させる手段としての天然理心流しかなかったのである。欲得を越えた剣は、強い。しかし剣客としてこの世を渡るに

は脆弱すぎる。生真面目すぎる宮岡武左衛門の心情は、感動こそされるが、決して感心出来るものではない。

それでも気がつけば、状況は一変していた。今では若い千人同心たちが、天然理心流を立派な剣術と認めて次々と門を叩いた。近藤内蔵助のもとで修練してきた多くの門人たちも、新しい門人に稽古をつけるようになっていた。坂本三助は戸吹の屋敷に道場を構えて指導できる立場になっていた。

「どう、思うか」

薬研堀の天然理心流道場は、近藤内蔵助が江戸で興したものである。出稽古で各地を飛び回る近藤内蔵助に代わって、一番弟子である小幡万兵衛健貞が道場を支えていた。

「儂に異存はござらぬ」

小幡万兵衛健貞は淀みなく答えた。

「江戸の道場には旗本門弟も多い。名主の倅に近藤宗家を託すこと、まことに大丈夫だろうか」

「旗本といえども、このご時世で御目見栄以下の連中ばかり。身分に胡坐をかいている連中は、そもそも天然理心流よりも有名どころへ参ります」

「はつきり云う」

「道理にて」

「ならば一存に任せてくれるのかな」

「御意」

小幡万兵衛健貞は旗本の生まれである。その旗本に異存がなければ、後継者の決断も容易である。近藤内蔵助は考えていた。そもそも狭量な旗本がいるのなら、最初から遠州浪人の近藤内蔵助に教えなど求めることはない。

「ご案じすぎじゃ」

小幡万兵衛健貞は苦笑した。

三助への宗家相続の儀は、江戸の門弟や宮岡武左衛門には薄々と浸透していた。本人への内諾もされた。が、そこから先は、二世襲名までの進展に時間を要した。

「うちの長男ですよ」

三助の父・坂本戸右衛門は、これでは名主としての本分を守れないとして、近藤内蔵助を大いに悩ませた。坂本三助が剣術をするのは、あくまでも自衛のため。名主を継ぐのが長男の責務だ。これは全うな正論である。

この解決に、近藤内蔵助は時間を要した。

「剣を極めても、こういうことに人は無力だな」

力なき笑みを浮かべる近藤内蔵助に、宮岡武左衛門は何もなす術がなかった。師に代わり根気よく説得することは、宮岡武左衛門も苦手だった。とにかくこのことだけに、時間

がむなしく過ぎ去ってしまった。

文化四年（1807）、近藤内蔵助は病に伏した。

「三助を呼べ、三助を」

近藤内蔵助は床の中より訴えた。これは、死期を悟った近藤内蔵助が宗家だけが知る奥義を相続することを意味する。小幡万兵衛健貞は馬を使えるとして、小泉茂兵衛幸隆に急ぎ戸吹へ行き、師の臨終までに参じるべしと命じた。

このことは戸吹の門人を騒然とさせた。

「名主には関係ない」

最後まで突っぱねる坂本戸右衛門を門人たちが抑えつけ、三助は小泉茂兵衛幸隆の後ろにしがみつくように馬上の人となった。坂本三助は間に合った。人払いされた室内で、近藤内蔵助から口伝で奥義が授けられた。誰も知らぬ、天然理心流の奥義。

やがて……近藤内蔵助はその夜のうちに病
没した。

「駄目だ、三助は長男だ！」

坂本戸右衛門は強情だった。しかし奥義ま
で授けられたからには、もはや三助は天然理
心流の二代宗家である。戸右衛門は名主とし
ての自分を守れないことに憤慨し、三助を家
事に引き戻すとまで声を荒げた。

江戸から小幡万兵衛健貞が駆けつけて、戸
右衛門を説得した。坂本家の将来がという部
分が、重き事ならば、小幡万兵衛にも考えが
あった。

「されば三助の近藤宗家は一代限り、とい
うのはどうか？」

小幡万兵衛健貞の言葉は明快だった。

「先代は血縁のない三助を後継者とした。さ
れば三助も門人から後継者を選ぶ。三助の子
は坂本家の惣領として家を継ぐべし。これで、

どうか」

不服だが、結果的にはそういう落ち着きが
理想である。

「しぶしぶと、である」

「それでよい」

一時はどうなることかと思われたが、一件
は落着いた。三助一代限りの近藤姓襲名、坂
本家の名主業は三助の息子・三作が相続する。
苦肉の条件であるが、どうやら事は収まった。

近藤三助方昌。新たな天然理心流当主は戸
吹村の道場を中心に修行に勤しみ、薬研堀の
天然理心流道場は小幡万兵衛健貞が代管理を
した。そして多摩地方における天然理心流は、
この三助の時代により、飛躍することとなる。

宮岡武左衛門の傍らには、いつしかもう一
人の男がいた。定吉、宮岡武左衛門の長男で
ある。

「稽古をつけて欲しい」

定吉の嘆願に、武左衛門は頷いた。ただし、父が剣を教えることは出来ぬ。亡き近藤内蔵助との約束だ。

「お前を鍛える男がいる。そのもとで励むべし」

宮岡定吉が戸吹村の道場へ入門したのは、文化七年（1810）三月のことである。このとき宮岡定吉は一六歳。武左衛門が定吉を近藤三助に託したのは、天然理心流の免許を修めさせたい一心からだった。そのためには肉親以外の師範に学ばねばならない。

「武左衛門殿の気持ちは、承知しました」

「御随意に」

近藤三助と宮岡武左衛門のやりとりには、信頼ありきの情がある。厳しきだけでは理解できぬ信頼。

「父子とも極めんと欲するとは、実に殊勝な

心懸けなり」

この頃の千人同心たちは、老境に差し掛かりながらも、一己の剣客として、寡黙のなかに威厳を備え始めた宮岡武左衛門に、ある種の畏敬の念を抱き始めていた。窪田組同心たちのなかでも代替わりは進んでいたが、彼だけは務めを譲ることなく、黙々と千人同心を続けていた。

「息子がおられるのに、なんとしたこと」

窪田組頭・増田磯蔵は事あるたびにそう洩らす。彼は伴侶に縁薄く、当然子もなく、意固地なまでに子を鍛えられる宮岡武左衛門が羨ましいのである。

「増田家は由緒ある御家柄、いずれは立派な御養子を以て盛立てることが適いましょうぞ」
「ならばよいが、せめて我が血肉を分けた子にと願うのが、人の欲というものではなからうか」

あとがき

この作品が世に出たのは奇跡のようなもので、長年のお蔵入りが、令和という新元号とともに陽の目をみる事となった。世の中は従来の物の考え方を見直そうとしている。逆臣の汚名を被る者には「義将」という、真逆の評価が出される時代だ。これまで見向きされなかった分野にも光が当てられる。千人同心への関心が高まったのも、そんな令和の空気が、少しは影響しているのだろう。

本作の準備稿は、萩原タケの物語を描いた「聖女の道標」以前にさかのぼる。当時は女子向けの風潮だったから、優先順位を逆転したに過ぎない。その習作はネットに一部公開され、時として高評もされ、場合によっては誹謗中傷や罵倒といった辛さも学んだ。それまでの夢酔流の作風を変えていくきっかけを作ったのが、この作品といってもよい。

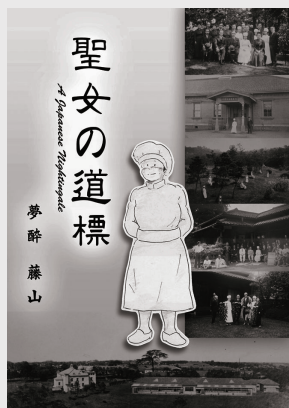
令和となり、連載時の筆名を「令和薫」としたのも、新元号を寿ぐという意味ではあるが、お蔵入り作品をそのまま出せる訳ではない。やはり令和の新しい作風にしなければという願いも、変名には込められている。その良し悪しを読者の感に委ねる。

令和4年2月吉日

夢酔藤山

歴史の夢に酔う

夢酔藤山の本



みちしるべ 聖女の道標

看護の道に生涯を捧げ、日本人として初めてフローレンス・ナイチンゲール記章を授与された五日市出身の女性、萩原タケの道のりを描いた西多摩新聞の人気連載小説を単行本化。

A5判 171ページ 1冊1047円（税込・送料別）



千人同心 日光への旅

西多摩新聞小説「千人同心がゆく」を執筆する作者自らが、日光勤番の千人同心たちの街道の旅を巡る。八王子を出発し、拝島、箱根ヶ崎を経て栃木へ向かう道を写真と文で紹介。

A5判 オールカラー
32ページ 1冊1100円（税込・送料別）

ご購入・お申し込みは西多摩新聞社出版センターへ

TEL 042-552-3737

〒197-0022 東京都福生市本町33

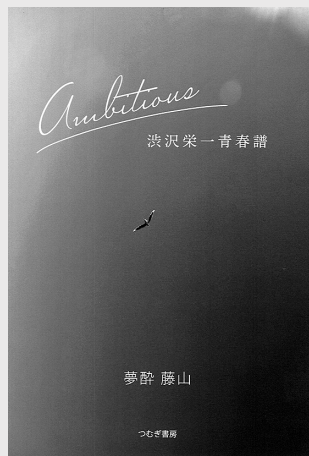
FAX 042-552-3778

※配送の場合は郵便払込用紙を
本と一緒に送ります

西多摩新聞HP購入申し込みフォームからお申し込みいただけます

む すい とう ざん
夢酔藤山 プロフィール

作家。楳の会・歴史研究会・全国里見一族交流会ほか所属
主な著書「Ambitious・渋沢栄一青春譜（つむぎ書房）」、
「聖女の道標（西多摩新聞社出版）」、ガイド本「千人同人
日光への旅（西多摩新聞社出版）」など
現在連載中「千人同心がゆく（西多摩新聞 ※令和薫名義）」
「御所車-知久太平記-（南信州新聞）」
四方山はこちらへ。
ブログ散文小径 <http://musuitouzan.blog.fc2.com/>



Ambitious 渋沢栄一・青春譜

日本銀行の父とされる渋沢栄一の青年期を描いた意欲作。本書掲載作「天狗の影」とセットで楽しめる内容になっている。渋沢栄一は新社会人になったばかりの若者像を投影している。すべての若者に、この作品を捧げる。

つむぎ書房刊行 四六判 並製本
130ページ 1冊1760円（税込）

「Ambitious 渋沢栄一・青春譜」はAmazonや、
出版社と直取引可能な最寄りの書店でご購入いただけます

※こちらの本は西多摩新聞社では
取り扱っておりません

問い合わせは つむぎ書房へ
support@tsumugi-shobo.com

本書は2019年7月から西多摩新聞に連載中の小説「千人同心がゆく」の掲載済み作品より著者が選び、加筆修正したものです。

千人同心がゆく 上巻

令和四年三月三日

初版発行

著者 夢酔 藤山

制作 西多摩新聞社出版センター
〒一九七〇〇二二

東京都福生市本町三三
☎〇四二(五五二)三七三七